

## 書 評

上野千鶴子著

# 『家父長制と資本制』

マルクス主義フェミニズムの地平』

渡 部 充

本書は、1980年より自らマルクス主義フェミニストとして活躍してこられた上野氏の過去十年にわたる仕事の総括といえる。全体は七章からなる「Part I 理論篇」と六章からなる「Part II 分析篇」の二部構成となっている。Part I はマルクス主義フェミニズムの理論と諸概念への導入篇であり、Part II は資本制の成立期から今日に至るまでの歴史過程のなかで階級支配と性支配がどのような関係を結び、その編成をどう変えてきたかをみる理論の実践篇である。Part I と Part II では内容に重複がみられるので、まずは主として「理論篇」の構制に依りつつ、適宜「分析篇」の歴史分析や現状分析にも触れながらこの実にチャレンジングな著作を紹介してみたい。

マルクス主義フェミニズムとは何か。上野氏によれば、フェミニズムの解放理論には「社会主義婦人解放論」、「ラディカル・フェミニズム」、「マルクス主義フェミニズム」の三つがあり、またこの三つしかない。社会主義婦人解放論は男性による女性の性支配を階級支配の従属変数とみなし、女性の男性に対する闘いを「資本制」に対する闘いに吸収統合しようとする。階級支配が終われば女性解放は自動的に達成されるとする階級支配一元論である。これにたいして60年代末のウィメンズ・リブにはじまるラディカル・フェミニズムはフロ

イト理論を社会に組み込まれた性抑圧の構造を解明する社会理論として活用する。これは性と世代の間に抑圧的な差別の構造を生み出す歴史的形態である「家父長制」の分析を通して、「家族」という制度の再生産のプロセスを暴くものだった。前者の階級支配一元論にたいして性支配一元論の立場である。

資本制と家父長制はそれぞれ「市場」と「家族」をその主たる領域として、社会の全領域に横断的に働いている。「市場」は（商品の）生産を中心とする論理にしたがい、一方「家族」は（労働力の）再生産をおこなう。マルクス理論による資本制の分析は、「市場」を「家族」や「自然」をその「外部」に排除して成立する一つの閉域とみなし、そこでおこなわれる交換の表向きの等価性と実際の不等価性（労働力商品の売買にもとづく、資本家による労働者の労働の領有、剰余価値の搾取）を暴くものであった。外部に排除された「家族」のなかでおこなわれていることは、人間の自己保存本能と生殖本能という「自然」に委ねられている。「性に盲目」なマルクス理論では、「家族」というブラック・ボックス内での性支配の構造がみえてこない。一方、フロイト理論（それは抑圧からの解放の理論ではなく、抑圧への適応の理論であった）とラディカル・フェミニストによるその読みかえは、「家族」という制度の再生産の構造を解明する。しかしここからは、「家族」がその外部である「市場」と結び関係と、後者が物質的に前者を支えているしくみがみえてこない。ラディカル・フェミニズムの達成に学んだマルクス主義フェミニズムは階級支配と性支配をそれぞれ独立した変数とみなしたうえで、「家父長制」と「資本制」が編成を変えつつ、歴史的に固有の関係を結び結ぶさまを分析する二元論的な構制になっている。それは「マルクス主義のフェミニズムへの適用ではなく、むしろフェミニズムの視点からのマルクス主義の読みかえ」（11頁）作業である。

この家父長制と資本制を取り持ついわば両者の関係の要となるのが「家事労働」の概念である。これこそマルクス主義フェミニズム理論の中心をなすもので、その最も重要な「発見」である。家父長制は家事労働というそれ自体の「下部構造」をもち、性支配はこの「物質的根拠」に支えられ資本制の階級支配と

手を結んでいる。女たちは家事労働という「不払い労働」を男たちに領有され、自らの労働から疎外されている。したがって、既婚女性は夫の階級のちがいや疎外感の有無にかかわらず一つの「女性階級」を形成する。性支配をイデオロギーといった「上部構造」に還元することで、「意識革命」や「性革命」によって終わらせることはできない。「女性の層としての解放」をめざすマルクス主義フェミニズムは、物質的利害を共有する女性の階級形成と女性だけの独立した政治運動を最初の課題とする。それは、性支配の物質的根拠を解明することで抑圧からの解放をめざす「文化的唯物論」の立場をとる。

家事（労働）は歴史的にどのように成立したのだろうか。資本制の成立期以前の共同体である「家 domus」の内でおこなわれる無償の「家内労働 domestic work」は、本来どこまでが生産でどこからが消費なのか区別することは不可能である。たとえば、農家が作物を育て、収穫し、それを自ら食べるために調理するとき、これは一連の過程であり、そこに線を引くことはできない。資本制の成立にともない、農家が市場で自家生産物を売るとき、労働は商品としての作物を生産するための生産労働（市場労働）とそれ以外の不生産労働（非市場労働）に分割される。この分割は生産活動がどの程度市場化されているかといった「都市的基準」によって決められるもので、両者の区別は本質的なものではなく事後的なものである。こうして家内労働から市場労働を除いた剰余が「家事労働 domestic labour」として抽出される。家事や育児も立派な「労働」であるにもかかわらず、それらはマルクス理論（市場の論理）では狭い意味での労働（生産労働）の範疇から外される。家事労働が市場から排除されていることが、それが不払い労働となる原因であり、その逆ではない。

仕事（市場における生産労働）と家事（家庭における非生産労働）の分割にともない、公的領域とそこから排除されるかたちで形成された私的領域の分割が成立し、性と年齢によって男性・女性、成人・子どもが各領域に非対称に配分される。私的領域は「女・子どもの世界」として「男の世界」である公的領域から価値的に貶下される。逆に、市場から外部に排除された家庭が18世紀か

ら19世紀にかけて理想化され「家庭性 domesticity」の概念が成立する。これは「母性愛」、「子ども時代」といったわれわれになじみの概念が自明のものとなった時代でもある。家庭は資本制から独立の神聖な領域であるという「家庭性の崇拜」もここから生じるだろう。

「家庭」は労働力商品の再生産をおこない、これをその外部である「市場」に供給する。ここで再生産というのは夫の日々の労働力の再生産と次世代の労働力となる子どもの出産・育児による再生産（人間の生物学的再生産）の両方をいう。近代化の過程にともないますます重要性を帯び、特権化されるのは「人口という資源」の供給源としての家庭である。恋愛結婚というイデオロギーは再生産のパートナーのマッチング・ゲームの「レッセ・フェール」であり、結婚を「自由市場」化した。誰もがほとんど誰とも結婚できるようになった近代社会では家族は性と生殖を統制する領域として「性化」される。再生産物である子どもは父親に帰属し、女のセクシュアリティは男に領有される。家父長制はこうした再生産の様式として規定しなおされるだろう。

初期には女・子どもを労働力として搾取した資本制もその発展にともない家父長制との関係を編成しなおし、新たな分割にしたがい労働力を再配分する。19世紀ヴィクトリア朝のイギリスでは労働力の市場と市場外への性別配当にもとづいた性分業型の「近代家族」が成立する。これは「家族解体にともなうコスト」が「家族を維持するコスト」より高くつくことに由来する資本制と家父長制との間の「ヴィクトリア朝の妥協 Victorian compromise」であった。したがって、「ブルジョア単婚小家族のなかの『家父長制』は、『封建的』な家父長制の残滓などではなく、市場によって、かつ市場にふさわしく編成された近代的な制度である」（179頁）。日本においても「家」という制度は封建遺制ではなく、明治政府による近代的な発明品であったことが示されよう。

近代の日本でも資本制と家父長制の絶えざる再編成がすすんできた。そこには「世界システム」としての資本制下におかれた日本が他の欧米諸国と共有する現象もあれば、日本に固有の状況もみられる。女子労働力の再市場化にあ

たって、夫を100%の生産者、妻を100%の再生産者に配当したヴィクトリア朝の第一次妥協による「性別役割分担」にたいして、女性を賃労働者にして家事労働者である「主婦労働者」としてその役割を二重化する資本制と家父長制の第二次の妥協がみられる。日本ではこの「新・性別役割分担」のもとで、おおくの女性が出産によっていったん職を離れたあと、育児が一段落すると再就職するという「M字型就労」のライフ・サイクルを選択する(させられる)。育児による仕事の中断というハンディを負った女性は不当におとめられた「女の仕事」につき(そのおおくがパートタイムである)、なにがしかの賃金を得る。こうして女性がもたらす「家計補助型収入」は、ますます高騰する子どもの教育費のかたちで労働力の再生産にあてられている。

「分析篇」の多岐にわたる興味深い議論には十分に触れられなかったが、以上がマルクス主義フェミニズムの理論構制のあらましである。上野氏の議論はその二元論的な構制のゆえに一見複雑だが、一元論的なマルクスやフロイトの理論よりも逆に明解なものになっている。このことは高度に理論化され精緻な議論を展開しうる前二者に比して、時として理論的に荒削りで場当たりの印象を与えるかもしれない。しかし、これはマルクス主義フェミニズムを理論のための理論ではなく、分析の道具(実践の武器)として採用された氏の戦略によるもので、そのことで逆に広いパースペクティブが獲得されている。マルクス理論の一元性は資本制の全域性を前提にする(じっさい、マルクスを読んでいるとそれが万能の思想であるかのように思えてくる)が、そのためにみえない「外部」をもっていた。氏にとって、マルクス主義フェミニズムはこれまでの「知」では不可視の領域をみえるようにするための道具なのだ。

さて、「家事」も「労働」であるとする説には、いくつかの誤解なり反論が予想される。マルクス主義フェミニズム理論の中心をなす「家事労働」概念の理解が決定的に重要と思われるので、以下では本書の内容を多少敷衍するかたちで、先に取り上げられなかった論点を拾いつつ、いくつかのポイントに絞って整理してみよう。まず、市場での交換価値をもたない生産をおこなう家事は

けっして「労働」ではなく、マルクス主義フェミニズムは「労働」が何であるかまったく理解していないというマルクス主義からの反論である。これは市場を閉じたシステムとみなして、そこでの交換ゲームを数量化する（マルクス理論をふくむ）近代経済学の立場からすればもっともな反論である。しかし、これはたとえば太陽が地球を暖めるからといって「労働」をしているわけではない、あるいはわれわれの内臓器官が消化という「労働」をしているわけではないというのと同様の自明のことをいっているにすぎない。家事は女という「自然」に委ねられるか、市場に登場する最小の分割単位＝「個人」である家族（夫と妻は一心同体）というブラック・ボックスのなかに遺棄されるかである。保守的なマルクス主義者には市場の外部で女たちによってなされてきた労働力商品の再生産という「労働」が理論的にみえてこないのである。

また、妻は家事にたいして夫から家計費やこづかいというかたちで収入を得ているのではないかという、おおくの夫たちやその男の論理を内面化して共有している女たちから予想される反論がある。かりに家事が労働であるとしてもそれが不払いであることを認めない立場（妻は夫に養われているとする）である。これも家事労働概念の本質をみないものだろう。家事労働は市場原理によって交換の対象となりうる生産労働の剰余としてはじき出されたものであるから、その対価を計量化することはできない。家事という再生産労働は量的に有限な生産労働とことなり無限に存在しうる。家事はいつてみれば一日24時間労働であり、その定義上、常に不払い労働であるという性格もっている。また再生産のすべてを市場化して家事労働を計量化することは、たとえば妻市場や夫市場や子ども市場での人と金との日常的交換を想定するようなもので不可能であろう。さらにまた「家族」と「市場」を統合した一つの閉じたシステムを考えようとする、価値の源泉たる労働力商品を自ら再生産する労働力商品としてシステムのなかに組み込むことになり、自己矛盾に陥ってシステムがパンクしてしまう。「市場」が交換のシステムとして労働を計量化しうるためにはどうしても「家族」という外部が必要になる。もちろん、歴史的には家事のかなり

の部分が市場化されてきている。たとえばクリーニング業や外食産業や家事代行業、さらには代理母（歴史的な、また今日のバイオ・テクノロジーによる）や託児サービスなどなど。かりに、家事のうち今日市場化されている部分だけをとりその対価を計算してみても、それは大抵の夫の収入を超えてしまうだろう。

これでは男（夫）にたいして不利にできた理論ではないかという声が聞こえてきそうである。男の労働が有限であるのに妻の労働が無限なのは、一方が市場という閉じた領域で計られるのにたいし、もう一方はその外部に無限に開かれている領域にあるからである。しかし、この非対称性は「家父長制的資本制」のもとで労働とその領域が二分され、各々が性によって非対称に配分されていることの裏返しの表現にすぎない。これは、女がその労働もセクシュアリティもふくめて身ぐるみ男に領有されてきたことに対するマルクス主義フェミニズムからの異議申し立てである。市場にあらわれる三つの行為者である「国家」、「企業」、「世帯」はこれまで「男」のものであったし、いまもそうである。家長である男が「世帯」を代表することで、女の労働は男の仕事の陰に隠された（陰として生み出された）シャドウ・ワークにされてしまった。近代における市場と家庭の分割にともない家（オイコス oikos）の学であった「家政」が市場に働く原理の学＝経済学となつたとすると、性にたいして中立的にみえる経済学は実は「男」の経済学であったのだ。

このように「女のすること」を「労働」や「再生産」という経済学のことばで語ることは一種の経済学主義であり、家事や出産や育児を近代の功利主義的・合目的な活動に還元してしまうことではないかという批判が出てこよう。家庭こそ資本制に解体しつくされることなく残っている抑圧からの「解放区」であるとする「家庭擁護論」や「主婦賛美論」である。なるほど、われわれはその対価を期待して合目的に子どもを生んだり育てたりはしていないであろう。しかし、家族を「一般的互酬性」の支配する「愛の共同体」として賛美することは、それが「家事労働」という物質的基盤に支えられていることで

資本制と結びついていることを無視し、また家族が容易に「抑圧と暴力の専制王国」に転化するのを忘れてしまうことである。女のすることを「男のことば」で語るのは、「もの」ばかりか人の営みのすべてを金に換算して経済合理的に考える「近代」の要請である。じっさい今日、養育費・教育費の高騰にともない一種の「ぜいたくな耐久消費財」となってしまった子どもの数を経済的な要因によって決定する親はおおいだろう。マルクス主義フェミニズムは経済学という男のことばによって語り、性や生殖を経済合理的活動に切り下げることで、逆に「近代」のはらむ本質的な問題をつきつけている。それはわれわれに、市場（公的領域）と家庭（私的領域）のあの分割、人の活動の労働と非労働へのあの分割を疑問視し、「労働」の概念をみなおすこと、「<労働>からの解放」ではなく「<労働>概念からの解放」（284頁）をせまっている。産業資本主義の分析をおこなったマルクス理論がそうであるように、マルクス主義フェミニズムもまた、それが分析する近代の家父長制的資本制にその理論の限界をもつ。それらは近代の生み出した「近代批判」であり、経済学のことばで語られる「経済学批判」である。健康な成人男子だけを「人間」とする近代思想では子どもは「人間以前」の存在、老人は「人間以後」の存在、女性は「人間以外」の存在とされてしまう（9頁）。ヒューマンズムをこうした近代の生み出した「人間」中心主義とするなら、マルクス主義フェミニズムはアンチ・ヒューマンズムである。

上野氏の提起する問題は幅広く奥が深い。それは、われわれの生きてきた（生きつつある）「近代」、われわれをその思想も感情も身体もふくめて身ぐるみ支配するその制度＝「家父長制的資本制」の根本的なみなおしを要求する。本書はこの「みなおし作業」にたいして重要な示唆を与えてくれるだろう。たとえば、「分析篇」にみられる18世紀「恋愛小説」や日本の「私小説」の「読みなおし」は本評の執筆者が専門とする「英文学史」の読みなおしをもせるものだ。なお、上野氏の文体はあいかわらずきはきとして「元気」がいい（ひょっとすると今日「元気」がいいのは「構造的劣性」におかれた者たちだけ



『家父長制と資本制 マルクス主義フェミニズムの地平』

かもしれない)。おおくの読者がこの行動的な知性に新たな刺激と知的な励ましを受けることだろう。（岩波書店、1990年10月、本文 330頁、2500円）